

1Tp-3(P) 朝鮮通信使饗応食一菓子一

秋山 照子 (香川明善短大)

目的：江戸時代、襲職の賀などのための朝鮮通信使の来朝は計12回におよぶ。一行は朝鮮側の総勢500人前後に、対馬藩、各藩の武士、人足が加わる3000～4000人の大集団であり、日程も5～8ヵ月を要する大規模なものであった。この間の幕府および沿道諸藩の対応はわが国の威信をかけたもので、饗応食もまた最高のものであった。これら饗応食の分析は日本料理の完成期でもある江戸時代の食構造解明のために有効と考えられる。ここでは、茶菓の接待に関して、饗応食中での位置づけ、格差の要因、菓子の種類などについて、同時代の菓子の発達、普及などとの関連の中で検討する。

資料：対馬藩宗家記録、「天和」「享保」「延享」「宝暦」「文化」の各信使記録（対馬歴史民俗資料館、慶応大学図書館他収蔵）、「通航一覧」他の通信使関係資料。

結果：①菓子は献立の品数、料理法、食品などと同様に、各々の役職に対応して(A)菓子の種類、(B)数量（個数、大小など）に格差がつけられた。②各信使の下分（中官、下官、通詞）の菓子の経年的比較では、時代の進行と共に減少傾向がみられるものはかき（ほしがき）、みかん、なし、ぶどうなどの果物類、増加傾向の最も顕著なものはまんじゅうで、それぞれの時代の菓子の普及を反映している。③いずれの来聘においても特定の菓子（果物）が高頻度で使用される、菓子の画一化がみられる。④菓子の種類には、食品における獣肉食にみられるような朝鮮風の影響は少ない。